

心の温度・体力を高める（教育の方法と技術の一考察）

～ グループワークが求められる背景と教育効果 ～

千里金蘭大学 黒瀬 哲也

吹田市立教育センター・不登校対応研究グループでは、子供たちの状況を心の温度・体力という側面から捉え、不登校対策につながる具体的な取り組みについて考察してきた。

不登校問題の切り口とした心の温度・体力には、明確な測定基準があるとは言い難いが、平成 30 年度（2018 年度）から先行して始まった道德の教科化などとも関連して近年話題に上ることがある。

心の温度・体力の基準は、温かいか冷たいかで示されることが多く、「心が温かいと自分らしく生きることが出来る。困難に遭ってもなんとかかなると思える。人に助けを求めることが出来る」などと語られる。冷たい状態は二種類あるとされ、パワーがある冷たさは、暴力や暴言につながり、パワーがない冷たさは、引きこもりを誘発する。どちらも課題のある状況だが心の温度・体力の低下は何に起因し、心の温度・体力を高める学校、教員、地域の取り組みとはどのようなものが考えられるのか探りたい。

なお心の温度・体力の測定については、QOL（quality of life：人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出しているかを尺度としてとらえる概念）など既存の指標や方法を活用して見えるものにすることも考えられ、今後の研究成果が期待される。今年度の研究の概要や成果については研究グループによる発表や紀要に詳しいが、本稿では心の温度・体力を上げる取り組みとしてグループワークを取り上げ、具体的事例等を示しながら学校教育の中でグループワークが求められる背景と効果などについて述べたい。

1. グループワークが求められる背景

高度情報化社会の到来により生活の利便性は格段に向上したが、人

と関わる場面が減少し、子供たちの間でも人間関係能力を向上させる機会の多寡については二極化傾向にあると感じざるを得ない。また他の国々と比較した青少年の自尊感情の低さは、国際調査からみても日本の大きな課題でありグループワークに代表される集団活動に参画し、「自分は必要とされている」と感じる体験を持つなど、自己有用感を高める取り組みが求められている。

表 1：世界青年意識調査「自分自身に満足している」

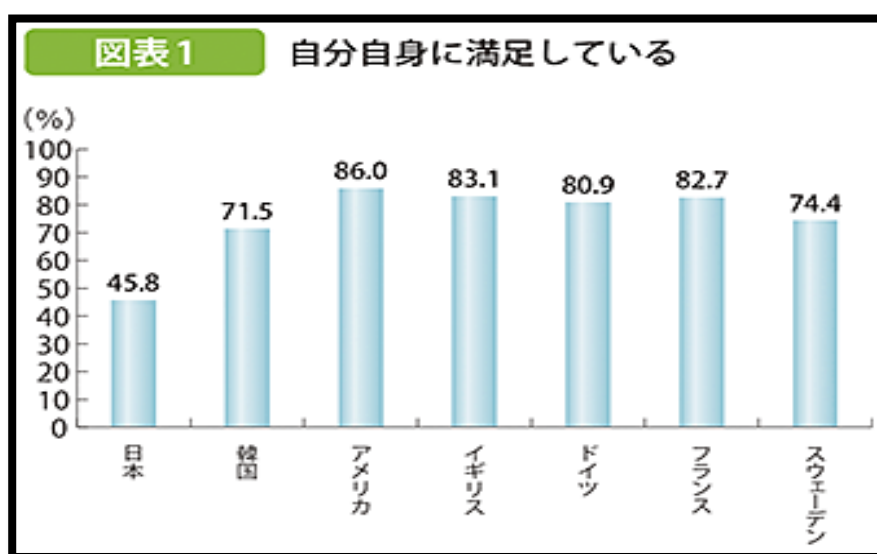
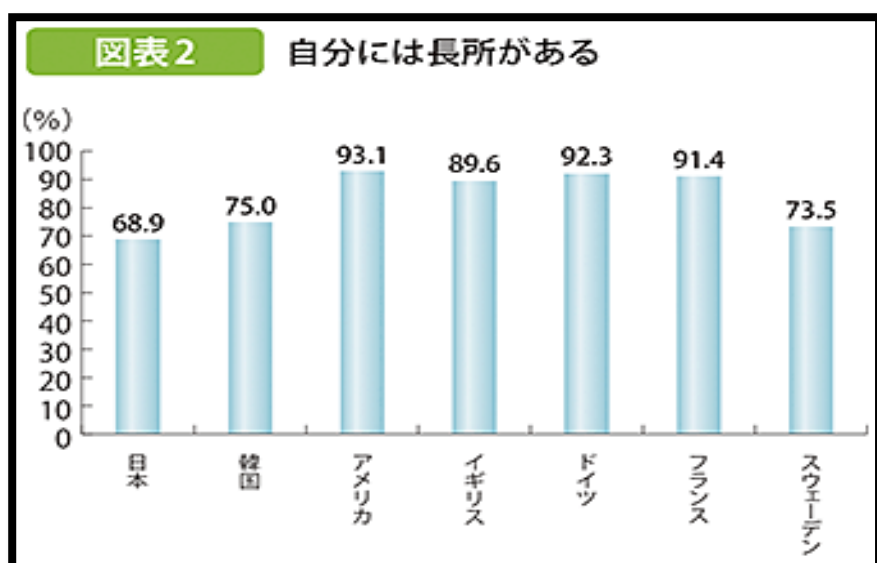


表 2：世界青年意識調査「自分には長所がある」



出典：2014 年度内閣府調査資料

また大阪の子供たちの自己肯定感は他の都道府県より低く、大阪府教育振興計画にも課題として記されると共に、次のように 2015 年度大阪府教員採用試験の小論文のテーマ（例年大阪の教育課題がテーマとなっている）にも取り上げられている。

「大阪府教育振興基本計画では、全国学力・学習状況調査における『自分には良いところがあると思いますか』との質問に対し、『当てはまる』と答えた児童・生徒の割合が全国と比較して低い状況にあり、自己肯定感の低い子供が全国に比べて多い傾向にある」と記しています。

あなたは学級担任として、子供たちの自己肯定感をより高めるために、どのような取組みを行いますか。『学校内での取組み』と『家庭と連携する取組み』それぞれについて、取り組む理由にも触れながら、500 字程度（450 字以上 550 字以下）で具体的に述べなさい。」

このような子供たちの自尊感情の低さは、大阪府の不登校児童生徒数の多さと無関係ではないだろう。

表 3：都道府県別不登校生徒数

順位	都道府県	不登校生徒数	
		総 数	中学生 100 人あたり
1	東京都	9,586 人	3.15 人
2	大阪府	8,162 人	3.51 人
3	神奈川県	8,071 人	3.51 人
4	愛知県	7,511 人	3.56 人
5	埼玉県	4,740 人	2.49 人
6	兵庫県	4,634 人	3.10 人

7	千葉県	4,302 人	2.66 人
8	福岡県	4,148 人	3.03 人
9	北海道	4,023 人	3.07 人
10	静岡県	3,490 人	3.42 人
単位人口：中学生 100 人あたり 出典：児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査。2016 年度文部科学省資料より			

不登校についても大阪府の教育課題として、大阪府教員採用試験の平成 29 年度（2018 年度）の小論文のテーマとなっている。

「文部科学省が行っている『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』によると、平成 26 年度（2014 年度）の小学校における不登校児童数は 25,864 名であり過去 10 年で最も多くなっています。

あなたは小学校の学級担任として、不登校を未然に防止するために、どのような取組みを行いますか。具体的な取組み内容を 1 つ挙げ、その取組みを行う理由にも触れながら、500 字程度（450 字以上 550 字以下）で述べなさい。」

不登校問題への対応と関わって、人と関わる体験、自己肯定感を感じる体験、集団活動に参画し協働する体験などの視点からもグループワーク等の重要性について、あらためて問うものである。

2. グループワークトレーニングについて

今回の研究では、教師が提供する意図的なグループコミュニケーションを通して、子供たちの自己肯定感等を高め、個と集団の成長を図る（不登校をはじめとする、子供たちの課題に迫る）という趣旨から

学校、学級などで行えるグループワークの事例として、グループワークトレーニングを取り上げた。

グループワークトレーニング（構成的グループエンカウンター）は、主に下記の３つの場面展開からなる取り組みである。

- ・インストラクション（ねらいや内容、方法、ルール等の説明を教師主導で行い、場の設定をする時間。）
- ・エクササイズ（ねらいを達成するために用意された課題を行う時間。）
- ・シェアリング（自己開示と相互理解など交流や共感し合う時間。）

フリートーキングなどに代表される非構成的な活動ではなく、グループやテーマなど教師が意図的な枠を与える構成的な活動を通して、子供たちの人間関係づくりを教師が援助し、より良い学習環境等を構築する取り組みである。

研究グループでは、グループワークトレーニングの例として「わたしたちのお店屋さん」を取り上げ、実際に中学校でも行いながら特徴と効果等について検証を試みた。「わたしたちのお店屋さん」は、概ね次のようなグループ活動である。（日本学校グループワーク・トレーニング研究会 2016、23-29 頁）

○すすめかた

（１）準備・説明

ア 子供たちは４～５人のグループに分かれ、机を囲んで座る。

イ 教師が用意した白地図を配り、課題を説明する。

「道路をはさんで、お店が 7 軒ずつなっています。どのお店が、どんな順番で並んでいるかを考えます。これから配るカードをもとに、みんなで話し合って、図にお店の名前を書き入れましょう。」

ウ 次のように重要なポイントとなる説明をし、「情報カード」を配る。

「これから配るカードは、トランプのようにきってみんなに全部配ってください。他の人に見せたり、とりかえたりしてはいけません。」

また他のグループの人とは話さないでください。」

(2) 実施

それでははじめましょう。時間は 20 分です。

(3) 結果確認・ふりかえり

ア 終了の合図をし、正解の図を配る。

イ ふりかえりシートを配り、記入する。

ウ グループ内で発表し合い、ねらいにそってまとめる。

一見すると楽しいゲームの様に感じるグループワークトレーニングだが活動には多様なギミックが組み込まれている。最大の特徴は自分が持っている情報や気づきをグループ全体で共有することではじめて課題が解決する仕組みになっている点（そのためのルールが存在する）にある。教師が提供する意図的なグループコミュニケーション（集団学習体験）により誰もが主体的に活動に参画し、認められ、グループの大切な一員として協力し合う関係が築き上げられていく。そこには、「集団に積極的に参画し、責任を分担する協働者を養成する」というねらいが明確に現れている。

また子供たちにとって自己開示や感情交流、共感し合う場面は楽しくもあり、大切な一人の存在として受け入れられる体験は心の温度を高め、自尊感情を育むなど、個と集団の成長を図る開発的な指導につながる取り組みになっている。

3. 千里キャンドルロードについて

千里キャンドルロードは、千里ニュータウン街開き 50 周年記念事業（2012 年）として始まった光のアートイベントで、7 回目を迎えた今年は、10 月 27 日（土）千里北公園を会場にして行われた。例年 9 万個のキャンドルに灯がともされ、1 万 5 千人の人が集まる「つながりと未来に向かってコミュニティの輪を広げる」が重要なコンセプトの参加型イベントである。

図 1：千里キャンドルロードのエリアマップと参加団体

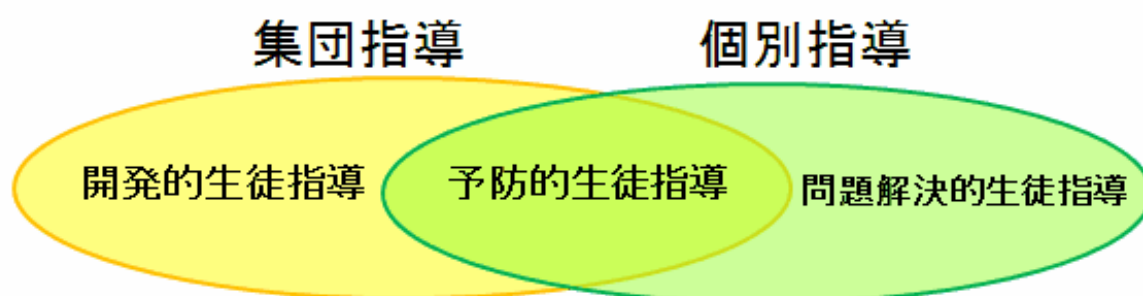


出典：千里キャンドルロードプロジェクト 2018 年度報告書

研究グループとして、吹田市の適応指導教室「光の森」活動の担当者が事前のキャンドルスタンドづくりから当日の設営、点灯まで児童・生徒たちと参加し、「生徒の前向きな姿勢があらわれた。」など、嬉しい報告が寄せられている。他に本イベントには、吹田市立藤白台小学校の全校児童が千里金蘭大学児童教育学科（教育ゼミ）のメンバーと共に取り組み、参加団体中最高の800個を超えるお絵描きキャンドルスタンドを協働して制作するなど意欲的な活動が展開された。地域でボランティアとして活躍する人々との出会いや生き方に触れ、仲間との協力や達成感を得るなど、地域連携ならではのダイナミックで心温まる（心の温度を高める）姿を随所でうかがうことが出来た。

生徒指導提要の開発的・予防的生徒指導の項では、集団指導と個別指導の両場面におけるバランスのよい指導の必要性が強調されている。

光の森を中心にした取り組みは問題解決的な生徒指導、藤白台小学校で行われた取り組みは開発的な生徒指導と捉えることも出来る。千里キャンドルロードのような地域の団体と学校がタッグを組んだ実践は、開発的・予防的な生徒指導がねらう「集団指導を通して個を育て、個の成長が集団を発展させる。」という成果につながる大きな可能性を秘めている。



千里キャンドルロードは、千里ニュータウン内で会場をかえながら毎年行われる。今年度の取り組みの成果等を踏まえ、千里キャンドルロードプロジェクトの皆さんをはじめ多くの地域の方々と手を携え、次年度も児童生徒たちと共に参画していきたいと考えている。

4. さいごに

吹田市立教育センターの不登校対応研究グループと一緒に進めてきた1年間の研究をふりかえり、学校、学級等や地域で行なうグループワークなどについて考察を加えてきた。

文部科学省の発表では、平成29年度（2017年度）の小・中学校における不登校児童生徒数は14万4031人（前年度比1万348人増）となり、昭和41年（1966年）の統計開始以降、初めて14万人に達して過去最多を更新したことが報告されている。まさに不登校問題の解決は喫緊の課題である。平成29年度のエコロジカルマップの研究では、子供たちのつながり格差の解消が不登校問題解決にとって重要であることを、事例研究などを通して明らかにした。今

年度は個と集団を育て、心の温度・体力を高める取り組みについて現場での実践も踏まえながら考えてきた。児童生徒数が過去最低を更新する中であって、不登校の増加は改善の兆しが見えない問題だが、子供は言うまでもなく将来を担う社会の宝物である。これからも多面的な角度からこの教育課題の解決に迫り、子供たちの人間関係能力の向上と温かく豊かな心を育む取り組みを追求していきたい。

引用、参考文献一覧

- ・日本学校グループワークトレーニング研究会著、坂野公信監修、2016『グループワークトレーニング』図書文化
- ・千里キャンドルロードプロジェクト、2018『2018年度活動報告書』



吹田市立藤白台小学校における取り組み



お昼休み、子供たちと一緒にスタンドづくり



千里キャンドルロード、点灯の様子